

吉野作造と 古高創立期の 人びと

一、はじめに

一九九七年（平成九）、創立百周年を寿いだ宮城県古川高等学校（以下、旧古中・古高と略す）はその間幾多の学制改革を経ながら「質実剛健」「文武両道」の古高魂を培ってきた。吉野作造（以下作造と略）との関わりで、ここに登場する創立期の人々は、いかなる人生を歩んだのだろうか。

二、鈴木文治と早坂奥郎

作造との関係で特筆すべき人物は、わが国初の労働組合「友愛会」の創設者、「日本労働総同盟」会長の鈴木文治（一八七五〜一九四六）である。

文治は、岩ヶ崎高等小学校を卒業し、開校したばかりの宮城県尋常中学校志田郡立分校に一二〇名の新入生達にまじって入学した。一九〇二年（明治三五）

三月無事卒業できたのは、わずかに三〇名にすぎなかった。文治の生家は、金成村の造り酒屋。古中時代は羽振りよく、文治は古川在、稲葉の四歳年上の同級生、佐藤長太郎の家に預けられて古中に通い、土曜日の午後や夏休みには、金成の家から人力車や馬で送り迎えされていた。

この佐藤家に、すでに旧制二高生となっていた作造の友人の小学校教師がいた。時折、作造がこの友人を訪ねて、談笑している姿を文治は、傍らで「驚歎の情をもって謹聴」していたのだ。これが機縁となつて、作造と文治は、終生親密な交遊を続けることになる。

文治が旧制山口高校に入學する頃家業は傾き、学資の仕送りも困難になると、作造は文治の為に月額八円の奨学金がもらえるように世話した。作造の文治に対する心底からの厚意は、作造の七歳も下の文治が、キリス

ト者としては三年先輩に当たっているという、作造の賛嘆の気持ちからだ。文治は一八九五年（明治二八）金成のハリストス正教会において受洗している。文治が古中四年の夏休み、栗原基の大学卒業を記念して、作造が企画実施した、古川三日町瑞川寺での演説会では、文治が司会役を務めている。

また一九一八年（大正七）末の浪人会と作造との立会演説会で、文治は会場内外の連絡係と、聴衆の整理係を行つている。

文治の著書『労働運動二十年』（一九三一年刊）に序文を寄せた作造は、楽天的素質と毀誉褒貶を超越している点をあげ「今日の鈴木君は依然として、三十年前の文ちゃんに外ならぬ」と揚言している。

佐藤長太郎は、のちに東京帝国大学工学部土木科を出て九州水力電気株式会社重役になつた。

文治と同級の早坂奥郎（一八八四〜一九一七）は、古高の名物先生数学科の早坂崇先生の父である。奥郎は、東京帝国大学法学部卒業後裁判官となつた。司法官候補を命ぜられて浦和裁判所に赴任する際、作造の許を訪ねているほどの間柄である。シルクハットを愛用し、瀬戸物の重ね弁当を愛用する粋な判事であった。

三、二回生 守屋栄夫

守屋栄夫（一八八四〜一九七三）は富永村出身。旧制二高から東京帝国大学独法科を出て、内務省に就職。二五年には、文治と共に「第七回国際労働会議」に、日本政府代表としてジュネーブへ。二八年の第一回普通選挙から、衆議院連続六期当選。のち塩釜市長。

栄夫は一九〇九年（明治四二）六月、作造の三女光子四歳の誕生日に、家を訪ねている。内務官僚として、作造の社会事業や朝鮮留学生の援助を、側面から支援した。

歌人でもあつた栄夫は、作造の「一生に大影響を与へし人」内ヶ崎作三郎の胸像除幕式（一九五六年九月）に臨み「胸ぬちに高き理想を秘めしまま逝きかへらぬ君をしぞ思う」等一五首を奉呈した。

四、五回生 吉野信次と 亀谷徳兵衛

作造の一〇歳下の弟信次（一八八八〜一九七二）は、旧制一高、東京帝国大学法科を経て商工官僚となり、一九三七年（昭和一二）商工大臣、五五年には運輸大臣に就任した。商工大臣就任祝賀の提灯行列には、古川在住の古中生が参加した。現在

校長室には、信次揮毫になる「倅信明義」の扁額が掲げられている。因みに信次の妻君代は、作造の妻たまのの妹である。

三十年になる「古高育英会」は、亀谷徳兵衛が、母校に寄付した二十万円を基金にして設立した奨学金制度で、生徒会活動の顕著な生徒に支給されている。東京帝大法科を出た亀谷の名は、作造の日記に十数回登場し、二人でよくテニスに興じている。一九一五年（大正四）五月には作造に子猫をあげている。

五、九回生 佐々木忠右衛門

東京帝国大学法科を卒業した佐々木（一八九二〜一九五二）は一九一八年（大正七）日赤朝鮮本部副総長に就任。一九二二年（大正一一）四月七日夜には、忠右衛門は突然作造宅を訪れ「朝鮮統治の心得など懇ろに話」した。戦後の初代古高同窓会長。

六、おわりに

吉野作造と古川高校―あまり関係がないように見えて、実は人間関係のベースでつながっていた。作造の交友関係の幅と信実の故である。

（横山 寛勝）